

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問十九(2)以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問十九(2)の答えは国語六の解答らんに書きなさい。字数の指定がある問題は、句読点や記号も一字と数えます。

類は写真家で、個展を開いている。その会場に娘の玲が訪れた。《憂い顔》の玲を見て、類はお茶に誘った。

〈第一場面〉

連れだつて歩き、お茶ならぬチョコレートを飲ませる店に入った。元気が出るかと思ったのだ。遭難者がチョコレート一枚で何日か生き／びた——などという話も聞く。《憂い顔》の人間にも、**キ**くに違いない。いつも混んでいる店だが、ちょうど、カウンター席の壁寄りが空いていた。隅が落ち着くだろう。玲を板の壁際に座らせ、かばうように隣の椅子に腰を下ろした。

ホットチョコレートを頼む。類は、ビターだ。

カウンターの向こうで、白いエプロンをつけた女の人が、銀色の手鍋を温めだす。

「学校は？」

「日曜なもの」

「ああ、そうだったな」

二人きりになったせいだろう。玲は、前よりはつきり、浮かない顔になった。

類は、すぐに話を続けず、カウンターの向こうに声をかけた。

「——素朴な疑問ですけど、ココアと、飲むチョコレートって、どう違うんです」

昔から、疑問が頭に浮かぶと、すぐ聞きたくなる方だった。確か、チョコレートもココアも、原料は同じ豆だった。

白いエプロンの人は、泡立て器を小さくしたようなマドラーを手にしながら、

「はい。チョコレートはカカオ豆から出来ます。ココアは、そこからカオバターを抜いたものです。当店では、薄めたミルクでチョコレートを溶いております」

1 よどみなく答えた。

「ああ、チョコレートの方が、脂肪が多いんだ。——だから、ミルクそのままだと、濃くなり過ぎるんですね」

「いえ。いけない——というわけではないんです。その辺は、お店次第ですね。薄めないで使うところもありますから」

女の人は、手鍋にチョコレートの粉を入れ、マドラーで掻き混ぜ始める。カチャカチャという賑やかな音がする。

類は、玲の方に向き直り、

「……すぐ答えられるところが、プロだね。それぞれのお店に、それぞれの味があるわけだ」

と、打ちした。玲が、こくと頷く。

「さあ。……それで、どうかしたのかな」

「うん。——道路標識の写真、今日、友達に見せたんだ」

玲は、カメラを片手にあちらこちらに出掛けて行く。通学やバイトの途中、東京の**街角**も撮る。家から自転車に乗って、お気に入りの

「注1」シヨットを探しに出たりもする。当然のことながら、シャッターを押す回数は大変なものだ。2 昔だったら、経済的問題に直面する。

今の玲には、デジカメがある。フィルムを丸ごと「注2」現象した時代とは違う。失敗したカットは、スイッチの一押しで消去出来る。経済的にはずつと楽である。気に入った作品だけプリントしてファイルする。

類も、ちらりと見せられたりはする。しかし、正面から批評を求められたことはない。時々、十枚ぐらい並べられて、さりげなく《この中では、どれがいい?》と聞かれるぐらいだ。《いいか、悪いか?》という問いではない。その辺が微妙だ。

写真の道に興味を示している若者が、どれほど多いか。真剣にそう思っている者なら、《ちよつと面白い写真》ぐらい撮れる。当たり前だ。次の一歩こそ、大河を跨ぐ一歩なのだ。

《道路標識》というのは、この数か月、玲がまとめて撮っている対象だ。

3 「ねえ、標識って、曲がつてることが多いね」

と、しばらく前に玲がいった。ただの世間話と思い、《ああ……そうかな》と、適当に答えていた。やがて何枚かの写真を見せられた。

丸いのは速度制限や駐車禁止を示す。赤い逆三角は《止まれ》だ。それぞれ、右側が曲がつている。丈の高いトラックなどが擦り寄り、接触したのだろう。組み合わせられた背景も様々で、カメラを向ける角度により、空になったり風景になったりする。

野外に立つものだ。原則として色落ちしない塗料が使われている筈だ。だが、中の一枚は違った。速度制限の標識の、円周の色彩が、薬で落としたように脱色している。剥がれて下地が出ているわけではない。なぜか、くすんだ灰色に近くなっている。その標識の端が、巨人の指が曲げたように、くにやりと曲がつている。非現実的だ。4 常識が裏切られるところから、訴えるものが生まれる。そこにある筈の見慣れた赤がない。代わりに、背景の夕焼けが唐紅といった鮮やかさである。

「これ、色の操作をしたの?」

デジカメだと、色々な遊びが出来る。類は、そちらの方には、あまり詳しくない。玲は首を振り、

「ありのまま。元から、そうなっていたの」

それぞれ、向かう角度の取り方、背景の選択にセンスがあった。褒めたわけではないが、表情から好感触だと思ったのだろう。玲は嬉しそうだった。

そのシリーズが、どうかしたのだろうか。

「——それで?」

と、うながすと、玲は脇に下ろしていたバッグに手を伸ばす。椅子が高いから、腰を曲げ、ちよつと窮屈そうな動きになる。雑誌やノートなどの間に紛れたのか、目当てのものを抜き出すのに、ちよつと時間がかかった。

チョコレートの方は、そろそろ出来上がったらしい。白いほうろうの「注3」バットに湯が張られている。ほうろうのバットなら、写真をやる者には「注4」暗室でおなじみだ。勿論、この店では現像に使ったりはしない。そこでカップが温められている。まるで、幾つかのカップが揃って旅行

に出掛け、機嫌よく温泉に浸かっているようだった。湯から引き上げられたカップは、濡れた周りを拭かれる。そして、手鍋からチョコレートが注がれていく。

視線を玲に返すと、バッグから引き出したファイルを渡してきた。

〈第二場面〉

受け取って広げた。

道路標識の写真が並んでいる。それぞれ、どこかの隅が、違う曲がり方をしている。情報を伝える《手段》として存在している標識が、それによって微妙に、⁵個性を主張していた。

「友達にこれを見せたの。自分でも気に入ったものになったから」

「うん」

「そうしたら……」

二人の会話を遠慮しつつ、《お待ち遠様でした》とカップが置かれた。

玲は、そのチョコレートを一口啜ってから、

「嫌な顔をされたの」

作品に、肯定否定は付き物だ。誰かが褒めれば、誰かはけなす。だが、

《嫌な顔》というのは単純な悪評とは違いそうだ。玲は続けた。

「こう、いわれた。——《画面として面白いのかも知れない。でも、標識が曲がってるってことは、車がぶつかったってことだよ。だとしたら、そこで誰かが怪我をしたり、もっとひどいことになったかも知れない。そんなところを素材にして、シャッターを押していいのか》って……」

……

⁶「つらそうな表情のわけは分かった。類は、そつとチョコレートを口にした。玲が、いう。

「構図を工夫したり、色調に気を配ったりするだけで、そこまで考えなかった。《特に、これなんかたまらない》って顔をしかめた。そういうわけで、⁷ぞくりとしたの」

そして、ファイルの一枚を指で示した。空が写っていた。春先のものが、空気感でいえば秋に似た突き抜けるような青さが印象的だ。中央上に雲がぼつんと浮かび、下に一方通行の標識がある。青地に白い矢印が、向きからいえば天を指している。標識の右側が、少し折れていた。「……いわれるまで、全然、考えなかったんだ。ただ、白い矢印の先が、白い雲を指しているのが面白かったんだ。……だけどね、もし、その子が、大事な人を交通事故で亡くしたとしたら、どうだろう。こんなものを見た、わたしのこと、きつと許せないよね」

類は、カップを受け皿に置き、

「玲ちゃんが、どうして苦しいのか、よく分かったよ。——友達と話している時だって、相手を傷つけることがある。こっちに、全然そんなつもりがなくてもね」

「うん」

「ものを作るのも、やっぱり対話なんだ。作るって行為そのものがそう。自分と作品とのね。そして、出来ちゃったものを誰かに見せたら、今度は、そこで——作品と観客が話し始める。でも、観客の耳に、⁸作り手が考えもしなかった言葉が届くことだってあるだろう。作られたものは、説明じゃないからね。——何行かにまとめられるようなテーマがあつて、それをそのまま伝えたければ、説明すればいい。そこに、絵や

写真や音楽なんて《表現》はいらない筈だよ。——そうすると我々の伝えたいのは、意図じゃなくて、そこから生まれた表現そのものになる。それこそが、人間にとって必要なものだ。——泣くのは悲しいからだろう。でも、誰かに見せつけようとする時は別として、純粋に泣いている時はどうか。《これで悲しみを表現しよう》なんて思っていない筈だ。ただ、止むに止まれず、泣くことを泣いている。そうだろう？」

「うん」

「でもそれは、悲しみと涙が別物ということじゃないんだよ。流してる涙が、言葉を越えた、《悲しみそのもの》なんだよ」

玲は、一所懸命、後を追うように、

「……喜んで踊ってる時は、こう、手を振ったり足を上げたりしてる動きが、もう、《喜びの表現》じゃなくて、《喜びそのもの》なんだって……ことよね」

「そうだよ。表現させる何かはある。後ろに何も無い表現というのはない。そこから生まれた、もう一つの《生命》が作品だ。ただ、痛くて飛び上がっているのが、喜んで踊っているように見えたりするかも知れない。そういうことはある。——玲ちゃんが、標識のシリーズを撮り始めた時にも、とにかくシャッターを押させる何かがあったわけだ。撮らずにはいられなかったんだ。いつてみれば、⁹玲ちゃんはカメラと一緒に踊っていた。お父さんは、それを感じた。だから、止めるようなことはいわなかった。踊れる時っていうのは、そんなに簡単にやって来ないからだ。それは、とっても大事な瞬間なんだ。——でも、実はね、あの写真を見て、——玲ちゃんが今日いわれたようなことも、感じたんだよ」

玲は、¹⁰目をしばたいた。

「——どうして黙っていたか。第一には、今いった通り、シャッターを押したいという《時》を大切にしたりできなかったからだ。——そして何より、これは玲ちゃんの、写真の基礎訓練だと思ったんだ。まだ、作品として発表するものとは思わなかった。——知り合いに見せて、どうなるかまでは考えなかった。結果として、玲ちゃんを苦しめちゃったから、これは、お父さんの判断ミスかな」

類は、ちよつと間を置いて続ける。

「他の風景の中に、ああいう一枚が入っていたら、それは風景の一部だよ。でも、曲がった標識を揃えれば、そこに作者の意図がある。それが前提だ。なくては揃えられない。見る人は、写真そのものを通して、その狙いを読むことになる。玲ちゃんの場合は、形の面白さを捕まえるようにしたわけだ。でも、その対象の裏には、確かに《人の痛み》があるよね」

「……わたし、夢中になって、¹¹それが見えなかった。カメラって《見る》ものなのね。わたし、写真に向かないのかなあ」

「そういつてしまえばね、玲ちゃん、生きていくってことが《見る》ことだろう」

「……」

「向く、向かない、で生きてくことは出来ないよ。大体の人間がね、生きていくには向かないもんだよ。傷ついたり、苦しんだりした時には、自分が¹²殻をはずして歩いている海老みたいに思えるものさ。でも、何とかやっていくんだ。そうしながら、色々な経験を積んでいく。そうして、少しずつ何かが見え始めるんだ」

「うん」

写

「全ての理屈を越えて、何を撮っても許される天才というのはいるよ。それは確かだ。——でも作品として、ああいうものにレンズを向けるとしたら、普通は、その裏にあるものを感じる力が必要だろう。感じられるからこそ、カメラを向ける時には、それを越える意図を持つことになる。これは、報道写真に関わる人間なら、毎日のようにぶつかる問題だよ」

類は、チョコレートのカップを取り直し、
「——作品には、意図がある。このチョコレートの作られたわけならね、《お客様をくつろがせて、ゆつたりと、落ち着いた気持ちになってほしい》。そんなところかな。その心をくみ取るなら、さめないうちに飲まないといけないね」

そういつて、ちよつとだけぬるくなったチョコレートを口に運んだ。玲も、話して落ち着いたのか、チョコレートの適度の甘さが味わえたようだ。

類は、カップを置きつつ、
「心を休めてくれる絵や音楽もある。——でもね、《芸術とは迷惑だ》という一面も、確かにあるよ」

「どういうこと？」
「土方異という舞踏家がいる。細江英公という写真家がいる。写真家は舞踏家を追いかけた。——秋田の田圃が広がる、大きな風景の中に出かけた。土方異は髭をハやし、裾や袖が、風ではためき、ひるがえる着流しの姿だ。それで、思うがままに野を駆けて行く。遠い遠い昔の、物語の中から出て来た、人間ではないものようだ。写真家は、その姿をカメラに収める。土方は、畦道に來ると、いきなり、そこにいた幼い子供を抱えて、田圃の中に走り出した。全速力だ。魔物の疾走だね。子供は曇天を仰ぎ、驚きと恐怖に泣き叫んでいる」

「うわあ」
「どうだい」
「何だか、トラウマになりそう。確かに、子供から見たら、大変な迷惑ね」

「だろう？ だけど、この一枚は、大傑作なんだ。《土方さん、やめなさいよ》と書いていたり、子供のことを心配してシャツターを押さなかったら、その傑作は生まれなかった」

「お父さんなら、助けに行っちゃいそう」
類は、柔らかに微笑み、
「そうだね」

そして、コップの水をひと口飲み、いった。
「玲ちゃんね、これでしばらく、交通標識に向けてシャツターを押せないだろう。でもね、それはたいしたことじゃないんだ。細江さんが土方さんを追いかけていたのとは違う。玲ちゃんが標識を撮っていたのは、——結局のところ、13型に寄りかかっていたんだよ。それでは、結局、次に進めない」

そして、立ち上がった。玲もバッグを手に取り、後に続いた。

外に出て、
「忙しいのに、ありがとう」

というと、類は首を横に振った。《いいんだよ》の意味ではなかった。
《まだ、終わらない》という意思表示だった。

「お茶も飲んで行こう」

これには、玲がびっくりした。

「だって、個展の初日でしょ。普通の日じゃないよ」
「もつと大事なことなんだ」

《第三場面》

近くの喫茶店に入り、注文を終えると、すぐ類が話し始めた。
「お父さんの、『北へ』は知っているね」

玲は頷いた。類の出世作となった写真集だ。何ともあつさりした題だが、内容はその通り、車の窓から、青森へと向かう旅の途中の、移り行く眺めを撮影したものだ。

レンズの高さが、ほぼ固定されている。限定された条件の中で撮りながら、展開される世界は実に豊かだ。その年の、写真界の大きな賞を取っている。今まで類は、自分の口から、それについて語ったことはなかった。だが、『北へ』という題名は、類を紹介する文には、必ずといっていいほど顔を出す。

知らされなくとも玲が、関心を持たぬ筈はなかった。類の仕事場にある一冊を引き出して、初めて見たのは中学生の頃だった。いつも類の撮る、穏やかな世界とは、全く違っていた。粗削りに見えるが、その分、一枚一枚に若々しい息遣いが感じられた。

人物をつかみ取ったものもそうだが、中でも、山中の夜明けの風景には、息を呑むような生々しさがあつた。白い渦となつて流れる霧の向こうに、林があり、その向こうに、黒々とした山影がある。上ろうとする太陽が、一日の最初の光を投げ始めている。おそらくは、一夜を明かした車中から叫ぶようにレンズを向けたのだろう。玲は、その写真に、のしかかつて来るような《力》を感じた。驚嘆すると同時に、やさしい父親としての類を知る身には、顔を背けたくなるような何かさえ感じた。

「——あれを撮るまでは、お父さんは全く誰からも注目されていなかったんだよ。あれが撮れたのも、一冊の本に出来たのも、全部、お母さんのおかげなんだ」

美々は、いつも陽気に、おかしいことをしゃべっている。その母が、どうやって類と結ばれたのか。《職場結婚よ》という説明なら、聞いたことがある。美々は最初の結婚をして、すぐに離婚した。仕事は、婦人雑誌の編集者をしていた。そのグラビア写真などを撮っていたのが玲の《お父さん》だった。めでたく第二の、そして今度こそ末永く添い遂げようと思う相手と巡り合ったわけだ。

「——お父さんは、子供の頃からカメラを手にしていた。そういつちゃあ何だが、才能はあつたよ。——どういう才能かという、若い頃からね、人に好かれ、褒められる写真なら幾らでも撮れたんだ」

類の頼んだ、ミントのハーブティーが来た。

「——まあ、いつてみれば褒められ上手なんだな。うちのおじいちゃんにはファッションを専門に撮っていた。写真をやり始めてから、そういう現場にも連れて行ってもらった。修業をしたんだよ。そのうちに、出版社の人とも顔見知りになる。——それでね、お父さんは、依頼主の希望通りの写真が、器用に撮れた。——写すものを、《女の人》に譬えるなら、その人の内面までつかんで写し取るには、本当の力がある。器用なだけじゃ出来ない。でも、そういう写真を、当人が喜ぶかどうかは別問題だ。誰だって、専門家が《本当にいい》っていう写真より、《美人》に撮れて一枚の方がずっと嬉しいだろう？ お父さんには、それが出来たんだ。

写

だから、重宝がられた。仕事は来た。それが嬉しくて、あっちゃこっちで働いた。でも、——迷いはあった。《自分の本心に撮りたい写真は、別にあるんじゃないか》という迷いさ。だけど、その《何か》が、うまくつかめない。そうしているうちに、どんどん時間だけは経っていく。

14 にここにこしていても、心の中では笑えなかった

玲の紅茶も来た。

「——そんな時、どういうわけか、お父さんのいらいらを見抜いてくれたのが、お母さんなんだ。最初は、仕事の打ち合わせをしていただけなんだ。それから、だんだん、色んなことを話すようになった。——知りあつてしばらくしてね、お父さんが足の怪我をした。機材を運んでいる時にやつちやつて、当分、普通に歩けない。仕事の方はしばらく休むつもりになった。気障に言えば、この機会に、自分を見つめ直すそうと思っただんだ。お母さんが《何か、撮りたいもの、あるの?》っていうから、《自動車の窓から撮りたい》って答えたんだ。動くことが簡単に出来なくなつた。そうなるって逆に、《今この同じ時間の中にいる色々な人や、風景を、この手で捕まえてみたい》という気が湧き上がって来たんだ。——お母さんは、こういう時、決断が速いんだ。じつと、お父さんを見て、《注》校了明けに土日をはからめたら、しばらく休める》っていった。雑誌の仕事をしていたから、忙しい時とそうでない時が周期的に来るんだね。《わたしが、ハンドルを握つてあげる》っていった。——その時、分かつたんだ」

類は、薄荷の香りのする、薄めた琥珀色のお茶を口に運んだ。

「——この人となら、いいチームが作れるかも知れないって」

玲は、くすぐつたような顔になる。

「何それ、のろけてるの」

「それもある。だけどね、いいたいことは、その先だ。——車で北に向かつた。人生の中での、15 本心に冒険といえる旅だった。フライングから覗く世界は、空気の色まで違つて見えた。——撮つて来た写真を整理すると、とてもいいものと思えた。お母さんも《凄》といった。こっちから頼んだわけじゃないのに、勢い込んで、知り合いの編集者に見せに行つた。写真集を出している会社の人だ。一目見て感心してくれた。本にすることが出来た。——こういうわけさ」

「だから、《16 お母さんのおかげ》なのね」

「そうなんだ。それまでは、器用な二代目というだけで、写真集を出す

立場じゃなかった。この本が、幸い評判になって、大きな賞まで貰うことになった。そうなる——だ」

「うん」

「同じことをやってみないかという誘いがあつたんだ。ある雑誌からね。車に乗つて、今度は別の地方に出かけたかどうか——という企画だ。同じようなカメラの位置から世界を見る」

「……」

「全く駄目だった。自分で分かる。中途半端な写真にしかならなかった。『北へ』は傑作だった。そうなのは形式のせいなんかじゃない。分かるね」

玲は、深く頷いた。

「——玲ちゃん。だからね、カメラを信じていれば——本当にいいものを作る瞬間というのは、大きくて強い、突然の波のようにやつて来る。波に洗われている間は、とてもいい気持ちだ。カメラを構える度に、それが来るのが天才だろう。——それは17 決して、型なんか寄りかかつたところから、生まれるものじゃない。だからね、今、標識のシリーズを進められなくなつても、少しも気にすることはないんだ。——それからね、玲ちゃん、自分を責めて《何も考えずにあんな写真を撮つた。わたしって駄目だ》と俯いた時、顔が下を向き過ぎて、《駄目》な方の玲ちゃんだけ見ちゃいけない。それは、自分に失礼だよ」

「……」

18 「その時、そこには、《駄目だ》と真つすぐに自分を責められる玲ちゃんがいる。そうだろう? 玲ちゃんはそういう子だ。いいかい、これは写真だけの問題じゃない。責めて進めなくなるなら、そこで終わりだ。でも、玲ちゃんが、その後、また一步を踏み出せば、きつと前より歩幅が大きくなっている筈だよ」

(北村薫『ひとがた流し』)

【注】

- 1 ショット 撮影する対象。
- 2 現像 撮影したフィルムを薬品で処理しプリントすること。
- 3 バット 長方形の平らな皿。
- 4 暗室 写真の現像をするために光が入らないようにした部屋。
- 5 校了 校正が完了すること。

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 よどみなく答えた とありますが、これはどういうことですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア つつかえたりせず、すらすらと答えた。 イ つつみかくさず、はつきりと答えた。
- ウ 迷うことなく、明るく答えた。 エ 考える間もなく、急いで答えた。

問三 本文中の にあてはまる体の一部を漢字一字で答えなさい。

写

問四 2 昔だったら、経済的問題に直面する とありますが、どういうことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア シャッターを押す回数が多くなるので、新しいカメラに替えなくてはならなくなってしまうこと。

イ フィルムを丸ごと現像しなければならぬので、費用がかかり大変になってしまうこと。

ウ あちらこちらに出かけて行くので、他のことをする大切な時間を失ってしまうということ。

エ スイッチの一押しで消去出来ないで、大量の作品が手元に残ってしまうということ。

問五 3 「ねえ、標識つて、曲がつてることが多いね」／と、しばらく前に玲がいった とありますが、「しばらく前」の出来事を書いているのはどこまでですか。おわりの六字をぬき出して答えなさい。

問六 4 常識が裏切られる とありますが、これはどういうことですか。次の（a）（b）の中にあてはまる言葉を本文中からそれぞれぬき出して答えなさい。

速度制限の標識の、円周の色彩は本来（a）である筈なのに、（b）に近くなっていること。

問七 5 個性を主張していた とありますが、なぜそのように言えるのですか。解答らんにあうように本文中の言葉を使って説明しなさい。

問八 6 つらそうな表情 とありますが、〈第一場面〉ではこれを何と言っていますか。三字でぬき出して答えなさい。

問九 7 ぞくりとしたの とありますが、なぜ「ぞくりとした」のですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 秋の突き抜けた空気感に寒さを感じたから。

イ 相手の言葉の調子が強いものだったから。

ウ 思いもよらないほめ言葉を言われたから。

問十 8 作り手が考えもしなかった言葉が届くことだつてあるだろう とありますが、「玲」が「考えもしなかった言葉」とはどのような内容でしたか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友人が大事な人を事故でなくした場所を、わざわざ写真に撮って作品にしているのかということ。

イ 標識が通常と違っているのを通報せずに、興味本位で写真を撮って作品にしているのかということ。

ウ 人が事故にあったかもしれないと想像しそうな標識を、写真に撮って作品にしているのかということ。

エ 見ている人が嫌でたまらないと感じるように意図して、写真を撮って作品にしているのかということ。

問十一 9 玲ちゃんはカメラと一緒に踊っていた とありますが、どういうことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 玲が心をひかれるものに出会って、夢中になって撮影していること。

イ 玲が手を振ったり足を上げたりして、構図を決めて撮影していること。

ウ 玲が思いがけないものを発見して、びくびくしながら撮影していること。

エ 玲が写すものの動きにあわせて、いろいろな角度から撮影していること。

問十二 10 目をしばたいた とありますが、どういうことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目をしょぼしょぼさせること。

イ 目をぎらぎらさせること。

ウ 目をばちばちさせること。

問十三 11 それ は何を指していますか。本文中から四字でぬき出して答えなさい。

問十四 12 殻をはずして歩いてる海老みたい とありますが、どういうことをたとえていますか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しいものを得ようと努力していること。

イ 決まりを破っても気にしないでいること。

ウ 自分を守っていたものを失ってしまったということ。

エ 余計なものを捨てて身軽になれたということ。

問十五 13 型に寄りかかっていたんだよとありますが、これはどういうことですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のセンスにたよって、アドバイスを聞かずにさまざまな構図の写真を撮り続けたこと。
 イ カメラを向けているもののおもしろさのみに集中して、何かを伝えたいという思いがないこと。
 ウ シャッターを押すことが楽しくて、何も考えずにたくさん写真を撮ることをよいと考えること。
 エ 他の人の写真に気を取られてまねばかりして、自分の本心に撮りたいものは何かを考えないこと。

問十六 14 にここにこしていても、心の中では笑えなかった とありますが、その理由を説明しなさい。

問十七 15 本心に冒険といえる旅だった。 17 決して、型なんかに寄りかかったところから、生まれるものじゃない。 とありますが、本心に決して がかかる部分をそれぞれ記号で答えなさい。

本心に ア冒険と イいえる ウ旅だった。

決して、 ア型なんかに イ寄りかかった ウところから、エ生まれる オものじゃ カない。

問十八 16 お母さんのおかげ とありますが、次の①～⑤のうち「お母さんのおかげ」にあてはまるものの正しい組み合わせを、後のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 打ち合わせ中にお父さんに美人の撮り方のアドバイスをしてくれたこと。
 ② 怪我をしているお父さんの代わりに車の運転をしてくれたこと。
 ③ お父さんの撮った写真を知り合いの編集者に見せに行ってくれたこと。
 ④ お父さんの気持ちを理解してすぐに行動に移してくれたこと。
 ⑤ 傑作を撮るために『北へ』とは別の地方に行く計画を立ててくれたこと。

ア ①―②―③ イ ③―④―⑤ ウ ②―③―⑤ エ ②―③―④ オ ②―④―⑤

問十九 18 「その時、そこには、《駄目だ》と真つすぐに自分を責められる玲ちゃんがいる。そうだろうか？ 玲ちゃんはそういう子だ。いいかい、これは写真だけの問題じゃない。責めて進めなくなるなら、そこで終わりだ。でも、玲ちゃんが、その後、また一步を踏み出せば、きっと前より歩幅が大きくなっている筈だよ」 について、次の(1)(2)に答えなさい。

- (1) この言葉で「類」が「玲」に伝えたかったことはどういうことですか。自分の言葉でわかりやすく説明しなさい。
 (2) (1)で説明した内容にあてはまるあなたの経験を書きなさい。ない場合は、見聞きしたことや想像したことでもよいです。

ノ
街角
ハ

びた

く

やし

問一

重宝

問二

問三

問四

問五

問六
a

b

問七

から。

問八

問九

問十

問十一

問十二

問十三

問十四

問十五

問十六

問十七

本当に

決して

問十八

問十九

(1)

(2) 答えは 国語一六 の解答らんに書きなさい。